設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 3年 9月11日
（卒塾臨時号）

# 中之島ニュース

［事務局］ 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 學塾・中之島事務局

## 第九期卒塾に際し

宮武清寛

塾生の皆様、ありがとうございます。

今日ここに、「人間学塾中之島」第八期・九期の卒塾の日を迎える事ができました。

本来であれば、「人間学塾中之島」第八・九期修了おめでとうございます。と、申上げなければいけない。と思うのですが、素直にそう申上げる事ができないのが口惜しくてたまりません。皆さんにとって、第八・九期はどんな年でしたか、令和２年１月の初め、「新型コロナウィルス」の報道が拡がりました。３月までは、あまり深くは感じていませんでしたが、３月の京都での宿泊研修は中止としました。

その時点では八期後半を開催できなくなるとは考えていませんでしたから本当に残念です。

コロナ禍という予期せぬ事態は、もちろん、起こらないに越したことはない災いでした。しかし、それに向き合ってきた１年間は決して無駄な時間ではないはずだと今は考えています。

夏ごろにはコロナの収束が近づいたと感じましたが、その後二波三波が襲います。コロナがきっかけで、日本の生活スタイルが変わりました。私達が行う研修の形も変えざるを得ません。十二月からはリモート配信を始めました。皆さんいかがでしたか。評価はしていただけているのかな。

私は、あるテーマをもって八期を始めましたが、途中で「継続」というテーマに変更せざるを得ませんでした。

しかしそれも不十分な年になった事を自己反省しています。

会場に来られない人やリモートでも参加できない人達が沢山おられました。

それらの事に関しては、皆様にお詫びしなければなりません。

本当に申し訳ない気持ちで一杯です。

そして今年の三月、私達にとって大きな存在であった、寺田一清先生が亡くなりました。西中務先生につづいての私達を導き続けてくれた。かけがいの無い存在を失ったのです。ショックは大きいです。

私は平成十六年天分塾七期の入塾ですが、そのきっかけを作ってくれたのが寺田先生です。

寺田先生との出会い・西宮えびす読書会での日々・天分塾・人間学塾での毎日、寺田先生との二人の思い出は尽きません。

もう何年もお会いしていなかったので、今はもうお会いしてお話をする事も叶わないということが信じられません。

しかし、世が乱れ、災害や疫病による不安な情勢や、思い通りにならない事ばかりつづいても、寺田一清先生はどこからか私達を見守ってくれている事を信じています。

先日、新型コロナ禍で行われた東京五輪が無事終了しました。

東京五輪開催については、皆様は賛否いかがでしたか？

東京五輪・パラリンピックの最高位スポンサーを務めるトヨタ自動車は７月17日、国内で五輪関連CMの放送をしない事を明らかにし、豊田章男社長ら関係者は開会式に出席しない。ただ、アスリートの支援や大会関係車両などは継続して貢献する。と発表しました。

報道では、CMを放映することで参加する選手への批判が強まったり、企業イメージが低下したりすると判断した可能性がある。

と言われていますが。

前年の株主総会で豊田章男社長はこんな話をしています。

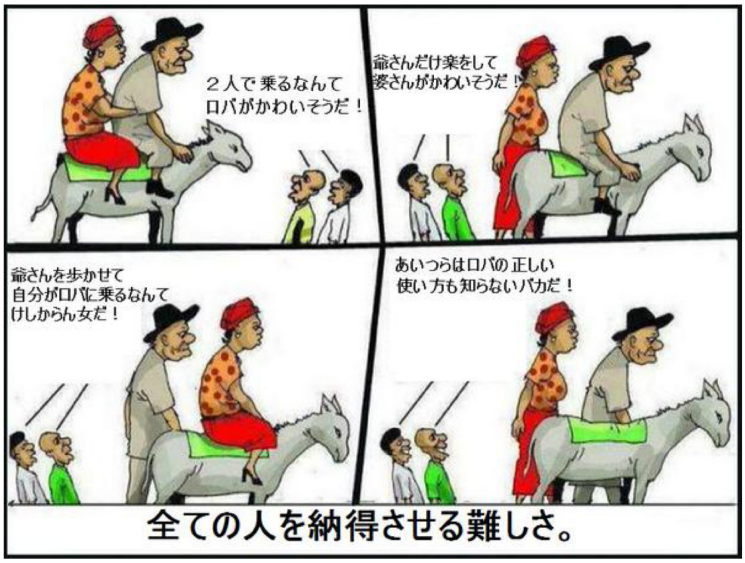
ロバを連れている老夫婦の話です。

1．ロバを連れながら、夫婦二人が一緒に歩いていると、こう言われます。「ロバがいるのに乗らないのか？」と。

2．また、ご主人が乗って、奥様が歩いていると、こう言われるそうです。「威張った旦那だ」

3．奥様がロバに乗って、ご主人が歩いていると、こう言われるんです。「あの旦那さんは奥さんに頭があがらない」

4．夫婦揃ってロバに乗っていると、こう言われるそうです。「ロバがかわいそうだ」。




要は『言論の自由』という名のもとに、何をやっても批判されるということだと思います。最近のメディアを見ていると『何がニュースかは自分たちが決める』という傲慢さを感じずにはいられません」と、言っています。

これは全ての人を納得させる事は非常に難しいという事です。

意志決定をすると必ず不都合な人が出てきます。それでも何が大切なのかを見極め、自分自身を信じることが大切になります。周囲の目線ばかりに気にせず、自信を持って自分の道を進む、そんな

新型コロナ禍で行われた東京五輪、大きな感動を与えていただきました。私は大会運営に関わった関係者、医療関係者、ボランティアの方々やアスリートの皆さんに大変感謝しています。

この人間学塾も、幾多の難局に直面しても、それを乗り越えて行かなければなりません。師の教えを胸に、自信と誇りと感謝の心をもってコロナ後の新時代の日本を共に創って行きましょう。

皆様には、人間学塾で「共に学び続ける」事をもって、自ら一灯を掲げ、皆様の周辺から、変革をしていっていただける事を、私は願っています。

皆さんよろしくお願いいたします。

本日は卒塾、本当におめでとうございます。

そして、ありがとうございました。

## 世話人代表を離任するについての挨拶

人間学塾は天分塾の方針を引き継ぎ、森信三先生哲学を中心に学び続けて参りましたが、今日9期を修了します。第一期から三期までは清水正博さんが、第四期から六期までは細川三郎さんが、そして六期からは私が世話人代表を務めてまいりましたが、私も三年間を終え今日ここに代表を退くことになりました。皆さん、いつもお世話になりありがとうございます。

ここに少し時間を頂きましたので、もう一つお話をさせていただきます。

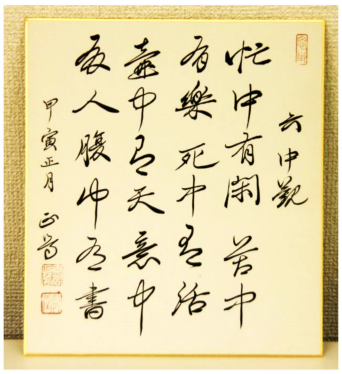
皆さんは、今日まで作ってきたものの中で最大の作品は何ですか。

私は、自分が創り上げる最大の作品は「自分自身の人生」だと思っています。創り上げた自分自身の人生こそが最大の作品だと考えています。私の人生など、多くの人達と比べれば取るに足らない小さなものかも知れませんが、自分自身で最善最大の「人生」を創ることです。

人を創る・人と成るという風に言い換えてもいいかもしれませんね。

人生観を考える上での精神のひとつに安岡正篤先生が話された「六中観」というものがあります。これを簡単に紹介すると、次のようになります。

「死中、活有り。苦中、楽有り。忙中、閑有り。壺中、天有り。意中、人有り。腹中、書有り」




「死中、活有り」とは、死ぬ気になって道を開こうと努力すれば、開けない道はないということ。

「苦中、楽有り」とは、苦楽とは相対的なもので、苦しみの中に楽しみがあり、楽しみの中に苦しみがあるということ。

「忙中、閑有り」とは、忙しいからこそ閑は存在するものだということ。

「壺中、天有り」とは、たとえがさついた世俗間の中に生きていても、自分だけの世界を持ち、それを深めていく努力が必要だということ。

「意中、人有り」とは、常に心の中に自分が尊敬している人物を持ち、日々、心の交流を行うことが大切だということ。

「腹中、書有り」とは、自分の心の中に信念や哲学を持っているということ。

これらの六つを一度に完成させるのは至難の業ですが、この六つのひとつひとつを丁寧にクリアしてゆくつもりで、いつもこの言葉を繰り返し心の中に銘記するように心がける必要があるでしょう。

苦しみも楽しみも人生の喜びとなって、我が身に取り込むことができるようになっていく自分、その姿に気づく日がやってくることを期待して努力していきたいものです。

我々の立場から二つのものを考えて見ましょう。

意中、人有り

尊敬する師を得て、それに学ぼうとするとき、どう学んでいくことがいちばんよい方法でしょうか。

私達には寺田一清先生がいました。先生を通じて森信三哲学を学びました。

寝食を共にした宿泊研修では先生の一挙手一投足に学ぶこともできました。先生の真似をする事も可能でした。尊敬する先生をいくら真似ようとしても、とても真似できるものではありませんが、それでも先生を真似ることで、その考えの真の意味に気付いたと感じることもありました。それが、私の生き方にどんなに約だったかは計り知れません。

その仕草までも真似したくなる、傾倒できる師を持つことの喜びが、人生を飛躍させる感動につながっていくのだと思います。

腹中、書有り

常に読みたい本があり、自分を導くための書、手本といったものを自分の中に備えている。そういう人はどこまでも向上していくことができることでしょう。それは、寺田先生が著してくれた数々の森信三先生の本です。それらの本を読み解いていくことでしょう。

本当に私達は幸せです。人生の幸せは、決して物量だけで計れるものではありませんが、生きていく中で、自ら幸せだと感じることが多いほど、その人は幸せなのです。たとえ他人から見て恵まれていないと思える人でも、その人自身は幸せを感じていることもあるのです。幸せかどうか、それは自分自身で決めることなのです。

私達は、意中に人有り。また、腹中に書も有ります。本当に幸せな環境にいます。先人達に感謝をしなければいけませんね。

寺田一清先生が中心になって創ってくれた人間学塾の理念に基づき、継続して学んでいくことが大切なことだと思っています。

これからも「人間学塾・中之島」を支えていってください。

皆さんよろしくお願いいたします。